

**旧国鉄石綿禍 神戸訴訟和解**

**桑名さん「天国の夫、仲間に報告」**

**救済へ意義ある一歩**

神戸地裁は、原告桑名さん（67）が被告旧国鉄（現国鉄清算事業団）に請求した石綿被害者への補償金1000万円を認め、和解成立した。桑名さんは、夫の死後、娘さんと母とで生活費を捻出しながら、夫の死因を究明し、旧国鉄に責任を問うてきた。和解は、桑名さんの苦闘の結末であり、旧国鉄側も被害者への救済に前向きな姿勢を示している。和解は、桑名さんの苦闘の結末であり、旧国鉄側も被害者への救済に前向きな姿勢を示している。和解は、桑名さんの苦闘の結末であり、旧国鉄側も被害者への救済に前向きな姿勢を示している。




賜物である。桑名さん、そして横浜裁判の原告である大前さんと小林さんが提訴したことにより、旧国鉄における石綿被害者への裁判における補償水準が確定したといえる。そして、補償内容に問題があるとはいえ、この4月から上積補償制度が新設されたことは裁判の成果であり、今後の被害者の救済に新たな道を開いたことになる。

なにより、娘さんとお母さんの

介護に追われながらも、裁判を闘い抜いた原告の桑名さんには、「ご苦労さまでした」の声をかけたい。桑名裁判は和解というかたちでひとつの区切りを迎えたが、旧国鉄における石綿被害者の掘り起こしと救済は、さらに引き続き課題である。勝利和解をバネに、さらに活動を強める決意である。



(ひょうご労働安全衛生センター)

た。2004年には発熱や息苦しさによる体調不良で地元の病院に入院し、退院後も自宅で酸素を吸うようになっていた。機関区で働いていたあいだ、蒸気機関車の炭じんやボイラー、配管、ブレーキに使われていた石綿を吸ったことが原因だった。

2007年10月、群馬県渋川市で開かれた「アスベスト被害をなくす群馬集会」の相談会に、北村さんは友人に付き添われてやってきた。持参したレントゲンフィルムを専門医に読影してもらったところ、石綿肺の疑いがあることがわかった。

その後東京・ひまわり診療所に通院しながら、2008年4月に国鉄清算事業東日本支部に石綿肺と続発性気管支炎の合併症として業務災害の申請を行った。

国鉄清算事業管理部の担当者、本部の嘱託医からじん肺管理区分の決定申請を行うように指示されているということで、北村さんの石綿肺をすぐに認定しなかった。レントゲン所見や肺

## 旧国鉄 群馬で初めて認定

### 群馬●元機関士の石綿肺

2008年10月末、群馬県高崎市にお住まいの北村幸男さん（71歳）は、鉄道建設・運輸機構国鉄清算事業管理部東日本支社より、石綿肺として業務災害認定された。

北村さんは、1958年に旧国鉄

の高崎第一機関区に臨時工として採用され、翌年7月から機関庫手として蒸気機関車の釜の清掃、整備の仕事をした。1965年に機関助手、1973年からはディーゼル機関車の運転士として1987年に退職するまで働い

機能検査の二次検査の動脈血ガス検査の結果からも、「著しい肺機能障害」は明らかであった。旧国鉄の業務災害認定にじん肺管理区分認定を受ける必要などない。

昨年10月、国鉄清算事業からやっと業務災害の認定をするとの連絡を受けたが、事後でもいからじん肺管理区分決定を受けてくれと言う。12月、群馬労働局からじん肺管理3イ+続発性気管支炎で要療養の決定を受けた。

国鉄清算事業管理部が発表する資料によれば、旧国鉄職員の石綿関連疾患による業務災害認定の件数は231件（2009年2月1日現在）であるが、群馬県内では石綿肺で認定された北村さんが初めてのケース。今後、ぐんま労働安全衛生センター、国労高崎地本による旧国鉄職員のアスベスト被害の掘り起こし活動にはずみが見つければと



思っている。  
 (写真右上は、定期点検中のD51、  
 2008年7月 高崎機関区)  
 (東京労働安全衛生センター)



## 元日通労働者遺族が提訴

兵庫●日本通運とクボタに損害賠償求める

1月30日、尼崎市のクボタ旧神埼工場にアスベストを運搬し中皮腫や肺がんで亡くなった日本通運の元労働者5人の遺族16人が、日本通運とクボタに損害賠償を求める訴訟を、神戸地裁尼崎支部に起こした。

遺族は、日本通運に謝罪と上積み補償を求めて、2007年1月より交渉を行ってきたが、誠意ある回答を得ることができなかった。

現役社員には労災の上積み補償規定があり、死亡の場合2,800万円を支給することになっている。しかし、元労働者の死亡にたいしては、退職者は対象外として応じず、2007年に見舞金・弔慰金を設けてそれを受け取るようにと回答していた。患者への見舞金は200万円、弔慰金は400万円である。

元労働者5人は、1954年から

83年の間に日通尼崎港支店に所属し、アスベストを運搬した。うち4人は神戸港からクボタ旧神埼工場にアスベストを運び、神戸港でもクボタ内の原料倉庫でも、手鉤で破れた袋からアスベストがこぼれ落ちたり、床に積もったアスベストが舞い上がったりする中、荷下ろしの作業を行い、また、トラックの荷台にこぼれたアスベストを箒で掃いたりした。残り1人は大物倉庫でやはりアスベストを積み下ろす作業を行った。大量にアスベスト粉じんが舞う中